

この度は、国内最高峰の大会であります標記大会へのチームとしての参加、およびレフェリーとしてのノミネートおめでとうございます。

リーグ H 加盟チーム、ジャパンオープントーナメント、全日本学生選手権の上位チームをはじめ、各ブロックでの厳しい予選を勝ち抜いたトッププレイヤー、トップコーチおよび日本協会審判本部より推薦されたトップレフェリー15ペアが広島に集結いたします。国内最高峰の大会というに相応しい舞台が整いました。大会のために準備いただいた開催地、広島県ハンドボール協会をはじめ、大会にかかわる全ての方々および全国のハンドボールファンの皆さんに、沢山の魅力あるプレーによって、ハンドボールの素晴らしさを発信できればと思います。

昨年、世界中のトップアスリート、観客がパリの地に集い、第33回オリンピック競技大会（パリ2024）が開催されました。日本男子チームがアジア予選を勝ち抜き、世界に挑戦する姿は、今でも鮮明に皆様の記憶に残っていることと思います。

パリ2024開催にあたり、IHFはハンドボールの将来を見据え、オリンピック競技としてのプライドを保ち発展していくことを目的に競技規則の改訂を行い、大会直前には大会審判員・テクニカルオフィシャルのみならず、参加する各国に向け指導内容を展開・共有しました。

その通知文には前語りとして、以下の3つの内容を記載していました。

★ この大会（オリンピック）で大きな変更や、特別な要望をすることはありません。競技規則の解釈は、これまでの世界選手権とほぼ同じです。

★ 私たちのスポーツ（ハンドボール）のイメージを守ることは非常に重要です。今回、身体的な違反行為に関しては、安全を保障するため、より明確に対応したいと考えています。また、今大会にノミネートされている審判員には、シミュレーションなどの行為に対しても、厳格に対応するよう指示しています。

★ 女子と男子の競技に異なるガイドラインを設ける理由はありません。

「危険行為に対する判定の基準」・「スポーツマンシップに反する行為」について改めて捉え直すことで、私たちのスポーツ（ハンドボール）のイメージを守ろうとしている意思が伺えます。IHFが危機感を感じ、スポーツとしての生き残りをかけたこの行動は、「世界で起きていること」ではありません。国内でも同様の危機感があることは、我々、ハンドボールに携わる者が共有しなければならないことの一つです。

未来を担う子どもにとってハンドボールは、やりたいと思うスポーツでしょうか。

保護者にとってハンドボールは、自分の子どもにさせたいと思うスポーツでしょうか。

学校や地域にとってハンドボールは、部活動、クラブとして開設、維持していききたいスポーツでしょうか。

企業にとってハンドボールは、企業スポーツとして出資、運営したいスポーツでしょうか。

今の日本のハンドボール、10年後、20年後はどうなっているでしょうか。

世界中を熱狂させたパリ2024は、選手やチーム役員の日頃からの努力の賜物であることは言うまでもありません。ですが、IHFの競技規則の改訂、事前の指導内容の共有があったからこそ、パリ2024はプレーの質が向上し、世界中の人々を魅了するプレーが数多く見られた大会であったことは、周知の事実です。

そして日本国内においても、人格形成を目指した「体育」という伝統から、「スポーツ」そのものを様々な方面から楽しむこと、スポーツの価値を世界の人々と分かち合い、スポーツを通じた社会変革に向け世界と協調していくことを目指し、昨年10月に開催されました佐賀大会より、『国民体育大会』から『国民スポーツ大会』へと生まれ変わりました。

変革は、IHF のみならず、我々審判団含め国内ハンドボールにも、同様に問われています。

本大会は、繰り返しになりますが、「国内最高峰」の大会です。周囲の期待も高いものがあります。それぞれの立場で、大会に参加する者として、「チーム（プレーヤー、チーム役員）として」、「レフェリーとして」、「競技役員として」、皆さんはどのような意識を持ち、パフォーマンスを示そうとお考えでしょうか。スポーツは「する」人だけでは成り立ちません。する人を「育てる」人、「支える」人、スポーツを「観る」人…スポーツはその全ての人から成り立っています。今のスポーツは、これら全てのスポーツ文化から成り立っているといっても過言ではありません。

スポーツだからできること、ハンドボールだからできることを一人ひとりが考え、スポーツの楽しさを感じ、共感し合える喜びや感動を、ハンドボールの持つ魅力として、我々から発信していければと思います。皆さまお一人お一人の行動が、ハンドボールのイメージを良くすることに繋がり、ひいてはハンドボールを守ることに繋がっていきます。

それぞれの立場から大会の成功、未来のハンドボールの発展に向けての準備をよろしく願い申し上げます。

第77回日本選手権大会に参加するにあたり、以下の内容を確認いただき、その準備の参考にさせていただきますと幸いです。

I 大会の組み合わせ・日程等

日本協会 HP に組み合わせ及び日程等が掲載されています。以下の URL より確認ください。

https://handball.or.jp/game/2025/nihon_senshukun_schedule.html

II 事前研修の共有

大会審判員およびテクニカルオフィシャル向けの事前研修内容を Google フォルダに格納しています。以下 URL より繋げていただき、内容のご確認をお願いします。

本フォルダは、チームの皆様も閲覧可能です。同様にご活用ください。

<Google フォルダ URL>

https://drive.google.com/drive/folders/1Wsy-8v8Crvts-J6Tnw3ldF_cz7y3RTNx?usp=sharing

III 本大会審判員の目標

国内最高峰の試合を担当すべく、国内全ての審判員の「模範」となるべく、国際基準に則したレフェリング、競技規則の運用は必須なものとなります。

審判員の任務として、前提にあることとして、以下のことが挙げられます。

**「チーム・プレーヤーにトレーニングの成果を十分に発揮させる
～「フェアプレー」の考え方のもとに～」**

1. ゲームマネジメントの視点で

(1) 「審判員の心得 10 箇条」より「①リーダーシップ」「②誠実さ」

- 国内の全てのレフェリーの「模範」となる立ち居振る舞いを。
- プレーヤー、チーム役員との良好なコミュニケーションを基本に、情報発信、予防的行動。
- 「穏やかに振る舞うことを基本」に、ボディランゲージは、大きく、明確に示す。違反の種類を表すボディランゲージは、その違反の内容を「具体的に示す」こと。

特にイエローカードを示した場合は、「これ以上、繰り返さないこと」を明確に示すために、「大きく、そして強いボディランゲージ」で示すこと。2分間退場以上の判定を下した場合は、まず、違反したプレイヤーに対して「具体的に違反の内容を示し」たあと、交代地域の戻る違反したプレイヤーを観察しながら、ジャッジズテーブルに向かって、会場全体に示すように「もう一度全体へ示す」ように（※違反を受けたプレイヤーに治療行為が必要であれば、最優先に！）。

- 試合開始 15 分間の基準作り、そして、その基準を試合終了まで維持。
- 試合終盤（僅差の場合や、残り 10 分を切ったからは全ての試合において）の集中力の維持。この時間帯にミスが決してあってはならない覚悟で。通信機器を利用し、お互いで集中力を高めるための工夫が必要。
- 7mスローの際のレフェリーの位置は、「スロアーの足」および「シュートの軌道」が確認でき、「スロアーの視野に入る」位置を取る。スロアーの真後ろには、立たない。
- フェアプレーの精神から逸脱した、スポーツマンシップに反する行為に対するレフェリーの毅然とした態度も、「誠実」さにつながる。

(2) バランス

- 「判定のバランス（特に近い時間帯における）」
- 「両レフェリーのバランス」（ペア間だけでなく、大会参加レフェリー全体が同じ基準で）
- 「両チームへの運用のバランス」

(3) 両レフェリーによる「任務分担」を超えた協働作業

- ピボットゾーンの攻防の管理
 - ・ 情報発信はコートレフェリーから行う。
 - ・ 両レフェリーによる「協働作業」で管理する。情報発信は「コートレフェリーより」行う。
 - ・ ダブルピボット等、多様な攻撃形態に対応できるように、通信機器を用いて連携を図る。
- シュート（ボールの軌道）の観察
 - ・ シュートコースと GK の頭部への直撃の有無を確認する。
- スローオフ
 - ・ スローオフは、正しく行わせること。
 - ・ スローオフエリアにおけるプレーの観察と、スローオフエリア外の観察を。得点后、コートレフェリーからゴールレフェリーへと戻るレフェリーが、スローオフエリア外の両サイドの攻撃側プレイヤーの位置を観察し、必要に応じて修正させることも必要。
- 通信機器を用いて、「両レフェリー」で管理しているという雰囲気を与える。

2. 判定基準の視点で

※ ★の項目は 別資料「【事前研修】Refereeing Guidelines」（下記 URL）を参照
<【事前研修】Refereeing Guidelines 閲覧先（下記リンクより閲覧ください）>

<https://drive.google.com/file/d/1dHQN5W2FmFN3FUAMI-26L7kzOWVQ0XGM/view?usp=sharing>

★ (1) 罰則の基準

- 身体接触における「許される行為」を確認する
- 競技規則は、「攻撃側」「防御側」双方に対して、「同様に」適用される。状況によっては、**攻撃側の違反に対し、罰則の適用もあり得る。**
- **過敏にならない。**ボールのないところの違反について判定を下す場合は、周囲に明確に伝わるボディランゲージで、違反の種類を示すこと。
- 身体接触における 8:4、8:5 の基準が明確であること。8:4 のみならず、8:5 相当の行為が、**試合開始直後から起こり得ることを「想定」しておくこと。**
- 8:5 を適当すべき違反行為について確認

- ・ 競技規則条文より

8の5 相手に対して危害を及ぼす行為をしたプレーヤーは、失格となる(16:6a)。危害を及ぼすような行為とは、違反が激しいときや、相手が違反を予期できず身体を守れないような状況での違反を意味する(8:5【注】を参照)。

競技規則 8:3, 8:4 に加えて、以下の判断基準を適用する。

- (a) 走っている、ジャンプしている、あるいはボールを投げようとしているときに、明らかに身体のコントロールを失う。
- (b) 顔や喉、首に対し、特に攻撃的な行為をする(身体接触の激しさ)。
- (c) 乱暴で相手の安全性を無視した違反行為

【注】 たとえ身体的衝撃の小さな違反であっても、相手がジャンプして空中にいる、あるいは走っているなど無防備で自分を守ることが出来ないタイミングで違反をした場合、極めて危険で重篤な結果につながる可能性を秘めている。このような状況では、失格が相当かどうかの判定基準となるのは、身体接触の激しさではなく、相手に対する危険の度合いである。

★ (2) ゴールエリア際の判定 攻撃側の違反か7 mスローか

- **ゴールエリア際の判定の精度が高いことが、ゲームマネジメントの質も高いと言える。**
- ゴールレフェリー時も、高い集中力を持って、エリア際を注視しておく。視線は常に「ゴールエリア際」「ボールのないところのプレーヤー」へ向けておく。「間接的に」ボールの位置を確認しておく。
- クロージングドアに対する攻撃側の違反は、**2名の防御側プレーヤーによる「すきま」が「完全」に閉ざされた状況**である。閉じていない状況であれば、7 mスローの判定もあり得る。
- ゴールエリアへの侵入とは、少なくとも片方の足が「ゴールエリアラインに触れた」または**「ゴールエリア内に明らかに踏み込んでいる」時**である。接触のスタート時点の的確に捉えること。また、**防御側プレーヤーがそれまでの防御行為の過程の中で、「ゴールエリアに侵入しないように振る舞っているかどうか(ゴールエリアを尊重して振る舞っているか)」**となる。**最終的な状況でのみ判断することなく、それまでの「過程」を確認すること。**

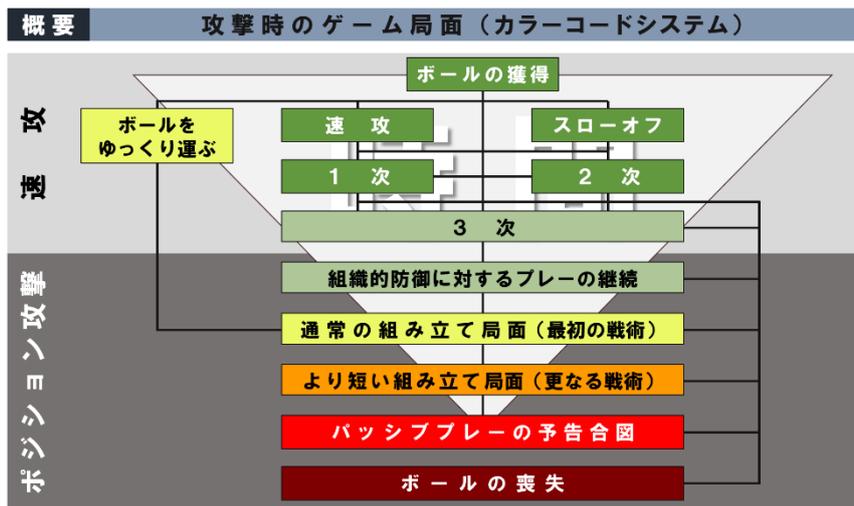
(3) ステップ

- ボールを持ったプレイヤーの「1歩」の定義、また「3歩まで進むことが許される」というルールは、過去から「不変」であり、ハンドボールが競技として成り立っていくための特徴である。
- 当然ながら、ボールをキャッチした瞬間を確認しない限り、正しいステップの判定はできない。
- モダンハンドボールの考え方から「スピーディーな魅力ある試合展開」が最優先され、観察がおろそかになってはいないか。
- 4歩以上進んだ時点で競技を中断させなければならない。
- アドバンテージを適用している状況下でも、ボールを保持している攻撃側プレイヤーに許されるのは「3歩」までである。4歩以上進ませた結果、攻撃側が得点につなげる（シュートやアシストパス）、また防御側の違反で防御側プレイヤーに罰則を適用することがあってはならない。

★ (4) パッシブプレー

競技規則条文（7:11、7:12、競技規則解釈4）の内容を熟読し、試合の全ての局面がどの場面に該当するかについて、適切に把握すること。

後手にならない。チームからの催促が正しい運用の場面とならないように。言い換えれば、チームに催促されて予告合図を示すことがないよう、局面を把握すること。通信機器を用いて、以下の表の場면을適切に捉えること。



<キーワード>

- ボール所持の開始の時点把握
- 速攻（1次、2次、3次）の見極め
- 選手交代のタイミング
- 「通常の組み立て局面」から「より短い組み立て局面」への移行のタイミング
- 「より短い組み立て局面」から「予告合図を示す」までの状況把握
- 予告合図を「示すべきではない」タイミングの確認
- 予告合図を示した状況で、違反の笛を吹くべきタイミング
- 予告合図なしに違反の笛を吹くべき特別な状況

以上よろしくお願ひ申し上げます。なお、先述のⅢ「2 判定基準」につきましては、別資料「【事前研修】Refereeing Guidelines」を参考にさせていただきます。

何かご不明な点等ございましたら、以下連絡先まで遠慮なく申しつけください。広島で皆様とお会いできることを楽しみにしております。



2025年12月4日

(公財)日本ハンドボール協会
競技審判本部長(大会審判長)

福島 亮一

futkun1212jp@yahoo.co.jp